

「落ちない鼻水」

栃木県 杉戸健彦

子供が嫌いだった。というか苦手だった。どうやって話しかければ良いか分からないし、子供のレベルまで会話を合わせるのも恥ずかしかった。そんな自分が、今、介護の学校へ通い、夏休みの間、知的障害のある子や自閉症の子が通う施設でアルバイトをしている。何故？と聞かれてもうまく説明は出来ないが今までの仕事が利益重視で人の顔、とくに笑顔を見る事の少ない仕事だったから介護、広く言えば福祉の仕事をしてみたいと思ったのかもしれない。そして、いつのまにかボランティアで訪れていた施設でアルバイトが出来るようになっていた。しかし最初ボランティアとして訪れた時は散々だった。

子供も接するのが苦手な自分が今まで関わった事のない自閉症の子供達とどうコミュニケーションをとればいいのかまったく分からず無言の時間が流れ苦笑いと気まずい時間が流れた。

その中でも一人、自分と目が合うと逃げてしまう女の子が居た。別に自分が何したってわけじゃないのに逃げていく事に少なからずショックを受けた。しかしそれが自分の中で何か点灯した瞬間だった。「この子と仲良くなってみせる。」それからボランティアで通う事に絵を書いたり、話しかけたりと試行錯誤してみた。しかしこちらが積極的に行っても、逃げなくはなくなったが別に仲良くはなれずに居た。そんな中、今夏、アルバイトとして働いている時にその子がパニックに陥る事があった。泣きじゃくり、周りにある物を投げている状態だった。そんな時、自分は無意識にその子を抱きしめていた。その子が叩いてこようが、落ちつくまで抱きしめてあげた。そうすると次の日からその子が自分の名前を呼んでくれ、一緒に本を読むように僕の服をひっぱるようになった。その子の口グセの中には今では僕が考えた言葉（ギャグ）も時折聞こえるようになった。

あれから何度かパニックになるとその子は僕の所に飛びこんでくるようになった。泣き止んだ後の僕のTシャツは鼻水がびっしりついている。これが洗濯してもなかなか落ちない。でも、僕は今どんなに良い服、高い服を着ていてもその子を受けとめてあげられる自信がある。他の人から見たら別にあたりまえの事なのかもしれないが、子どもが苦手だった僕がここまで変わったという事は大きな事なのだ。